

議 事 録

会議の名称	第2回三田市総合計画審議会
開催の日時	令和3年5月25日(火) 18時30分～20時30分
開催の場所	オンライン会議
出席した委員の氏名	中瀬会長、角野副会長、赤澤委員、馬場(美智子)委員、中村委員、田邊委員、足立委員、清水(陽子)委員、和田委員、古田委員、長谷川委員、大東委員、寿賀委員、奈良委員、下中委員、里中委員、的場委員、馬場(路子)委員、小谷委員、吉田委員、福田委員、小林委員、岡田委員、合田委員、大坂委員、川邊委員、佐藤委員、高崎委員、小川委員、坂場委員、武田委員、藤田委員
欠席した委員の氏名	清水(浩一)委員、松原委員、岸本委員
出席した庶務職員の職及び氏名	濱田副市長、高見副市長、田中市長公室長、太田政策課長、山谷総合計画策定担当課長、靱井政策課係長、森谷政策課主任、志水政策課事務職員、山田政策課事務職員
その他出席者	なし
傍聴者の人数	3名
議 題	基本構想(2)について
会議の概要(結論)	・基本構想(2)について、事務局から説明を行い、意見交換を行った。
公開・非公開の区分	公開
使用した資料	次第 資料9 基本構想(2) 参考資料 人口推計について
連絡先	市長公室政策課 電話(079)559-5038 内線(2211)

1 開会

＜田中市長公室長の司会により開会＞

2 議事

(1) 基本構想(2)について

＜事務局から資料に基づき説明＞

会長：ポイントを絞って議論したい。まずは「人口動向」について、ご意見をいただきたい。

委員：人口ピラミッドと資料9の8ページに記載されている高齢化について、現在の三田市では50～60歳代の人口に該当する働き盛りの世代が現在多いが、10～20年後に高齢化率で全国を上回るというニュータウン特有の現象がみられることになる。少子化対策や若者を取り込む施策自体は理解できるが、この世代のボリュームが多くなることに関して、この世代がいきいきと暮らせるまちは大事であると感じている。この総合計画の内容を越えるかもしれないが、10～20年後の大きな変化を見据えて、まちづくり人口という観点でも、50～60歳代が車を使わず

暮らせる健康都市や、若い人だけではなく高齢者同士でもしっかりと助け合うという関係性を作ること、多様な人や世代と交流するコミュニティを作ることも重要だと考えている。三田市はコミュニティがしっかりしており、防災意識も高いが、50～60歳代が高齢化することを見据え、ある程度具体性を持って、コミュニティを論じることも必要だと思う。資料9の9ページ以降も三田市なりのよいまちづくりが出来るイメージが示されているが、この年代の人達が具体的にどう生活するのかのイメージがあった方が良く思う。

会長：若者・いきいき暮らす、健康都市、高齢と若者が相互に交流するコミュニティ等のキーワードをいただいた。資料9の9ページ以降の抽象的な言葉が並ぶが、これらの言葉について具体的に議論いただきたい。まずは若者について、委員のみなさまの意見からご意見をいただきたい。

委員：三田市には空き家問題があるという仮説がある。移住という観点から考えれば、空き家にすぐ住めるので、宝として考えることができる。空き家がある三田市には宝があると捉えることができる。

委員：若者の移住について述べたい。三田市に隣接する丹波篠山市や神戸市北区等の移住の取り組みに関するPRをよく目にする。三田市は人口増加率日本一が10年続いた。現在、その世代が核になっている。移住者を増やす取り組みは、他の自治体に多くライバルがいるが、三田市に関しては移住者の子や孫世代に向けた取り組みを更に進めてよいのではないかと。移住者自体を増やす取り組みは一定成功していると思うため、今後は三田の住民に向けて、定住のPRを今より更に進めてはどうかと思っている。

委員：少子化と高齢化について述べたい。少子化対策については、子どもを育てることに視点を持っていくと、子どもが活躍するまで20年かかるため、関西学院大学の学生が卒業後も引き続き住みたくなるまちづくりを提案したい。すぐに住める家を活用して成功している自治体がある。高知県梶原（ゆすはら）町では、市が仲介して家を貸し出すことで人口増に転じている。また、どういう若者が移住するかという点も大事であり、衣食住のスキルが高い若者は、災害時の助けにもなる。そうした若者を集めるような取り組みを行ってはどうか。高齢者については、「健康寿命」という言葉を第5次総計に入れていただきたい。食育や食べるものが人の体を作るという考えで、近所で若者と食事をする等健康を保っていただいて、高齢者を私達が支えるという取り組みをしたいと考えている。高齢者の第2の人生と一緒に頑張っていきたいと考えている。

委員：関西学院大学の学生の卒業後という観点に同感である。学生はキャンパスに5,000人以上いるが、三田市に残る人がほとんどおらず、彼らがどうやったら三田市に残るのかを考えたい。三田市の下宿の家賃が高額で住めず、下宿先として三田市内の割合が低くなっており、三宮や宝塚市に住んでいる学生が多い。空き家があるならば、三田市内に学生に住んでもらい、三田市の良さを知ってもらってはどうか。また、三田市出身の子どもたちは高校卒業後に三田市外に出てしまう。関西学院大学の学生と、最初から三田市に住んでいた人の定着を考えて欲しい。

委員：高平地区では住民自ら魅力を発信して移住者を増やしている。幼稚園も、高平地区への移住者が半分以上を占めていると聞く。行政は直接取り組みするよりも、「支援する人」を支援するほうがよいと思う。

会長：ニュータウンや既成市街地の空き家をどう使うかということがテーマとなった。移住者の子どもや孫、また、関西学院大学、湊川短期大学の学生だけでなく、高校生も定住を考えるターゲット

ットになるのではないか。高平地区の話があったが、支援する人を支援するノウハウを三田市内の他の地区に広げていくことを考えたい。続いて、高齢化や健康についてご意見をいただきたい。

委員：高平地区でお世話になっている人から、高齢者に必要なのはきょういくときょうよう、すなわち今日行くところと、今日の用事であると教えてもらった。市が説明するまちづくり人口の考え方は、高齢者は活力がないという前提にたっているように思うが逆ではないか。今の60～70歳代の方は元気である。逆転の発想で高齢の方が活躍できる場を用意する。例えばニュータウンに住みながら、農村部で元気に仕事をするのが三田市ではかなう。高齢者は活力を生む財産であるという前提に立つ方がよいと考えている。

委員：健康寿命を延ばす取り組みが必要であると考えている。市ではいきいき百歳体操を行っているが、高齢者が自分らしい豊かな生活を送ることができる取り組みを進め、三田市は健康寿命人口日本一を目指すべきだと考えている。ここで質問があるのだが、高齢者の中で自立した生活を送っている方はどれくらいの割合いるのか。

事務局：担当部署からは、「自立」の定義づけが難しく、ご質問の数値は把握できないと聞いている。

委員：私は81歳で高齢者に該当する。ここ10年ほど10人程度の仲間と竹に関わる取り組みを進めている。筍（たけのこ）の水煮や和紙等を作り、女性や高齢者同士でコミュニケーションを取りながら販売している。阿南市では同様の取り組みが成功しており、障害を持つ方が作る筍が大きな収入源となっている。地域コミュニティの経済圏や労働者協同組合等において、地産地消のもので経済を回すことが地域経済活性化に貢献するので、三田市でも実施することを提案する。

会長：高齢者の生き甲斐をどう活用するか、高齢者が師匠的な位置づけで活躍すれば健康寿命が延びるのではないかという点、地域経済や地域コミュニティを活性化する手段として竹の事例をお話しいただいた。続いて、地域コミュニティについてご意見をいただきたい。

委員：ニュータウン地域では、高齢者が放課後子ども教室の活動を地域内で行っていただいている。学校を通じて案内を出しているが、案内の内容がイメージできないことや、自分も何かをやらなければならないのではないかという懸念、あるいは不審に感じ、保護者が活動を十分に活用できていない現状がある。お祭りの案内を渡しても、親に見せると、「よくわからないから」とかえって親に参加させてもらえない子がいる。当日に加わりたくても事前に申し込みをしていない子どもは保険や安全性の関係で、一緒に歩けないようなこともある。せつかく地域に良質な行事があっても浸透しておらず、活かしきれていないため、機会があれば浸透させる方法を考えていただきたい。

委員：お祭りの参加の話題については理解できる。どう解決するかは難しいが、やはりコンテンツが魅力的であることが重要。リアルなものをコンテンツにして親にも興味を持ってもらうことが大事ではないか。逆転の発想として、有料化してしまうのはどうか。お金を払うことで、かえって安心でき行こうと思うかもしれない。

会長：部会でもお話いただきたいが、消防団や農業の会等、伝統的な組織と新たな組織がある。これらをどうネットワーク化するかについても議論していただきたい。

委員：地域コミュニティでの実践例を紹介したい。子ども達を対象として農業に関する取り組みを行っている。子どもは自然があれば、虫、食べられる草、ちょっとした作業を一緒に行う等、勝

手にコンテンツを見つけてくる。また、2022年から畑を手放す人が増えると聞いているので、畑を維持できない方から借りる等、三田市内で田畑を維持する人と、地域で畑学習をしたい若者をマッチングする取り組みを進めてはどうかと考えている。

会長：リアルが重要という点や、生産緑地の指定解除による農地流通の増加という観点が挙げられた。次に、「まちづくりの基本目標」や「まちづくりの視点」について、ご意見をいただきたい。

委員：「ひと」×「まち」×「さと」については、「まち＝都市空間」、「さと＝里山」となっていると思うが、私が住む旧市街地はどうなるのかと思った。説明を受け、かけ合わせという考え方には納得した。旧市街地には独自のお祭り等もある。天神地区の再開発されたニュータウンには子ども会が残っており、子ども会に入っている子は、親の自治会への関わり方に関わらず、誰でもお祭りに参加させている。保存会の人の平等でフラットな姿勢によって、ニュータウンの子どもも参加することで存続し、成功しているため参考になると思う。

会長：高平地区のように、いろいろな成功例をリストアップしたらよいと思う。

委員：三田市には、人口増加率日本一であったという大看板があり、実績がしっかりしている。この実績を前面に出したPRを行ってはどうかと思っている。キャッチフレーズやインパクトがあるフレーズとして、定着率日本一のような項目が計画中にあっても良いのではないかと思った。

委員：資料5に関連して、小中高生のアンケート調査があったが、子どもたちへ公表する機会はあるのか。

事務局：現在は市のホームページで掲載しているだけであるが、ぜひ小中高生に見て頂けるようにしたい。

委員：市のICTに関する説明を聞くと地域の移動のしやすさを強調されたように思う。最近の技術であれば、食べたもの・移動・コミュニケーションといった情報を一元的に収集することもできる。0歳児の死亡をなくすための取り組みとして生まれた母子手帳のように、誕生から高齢者までの情報を収集して健康に活かさないか。認知症や生活習慣病についても、ICTで健康情報を集めておくことで、事前にアドバイス等ができるのではないかと考えている。健康寿命を延ばすための技術として考えてほしい。

委員：関学生の定住について関学生自身の目線から述べたい。三田市のまちの不満点を話し合ったことがあり、他市から入学した同級生3人中2人が道路の側溝のふたが塞がれていない点が一致した。些細なことかもしれないが、意外と見ている。運転しづらい、安全面でも不安があることに繋がるため、対応するほうがよいと感じた。

委員：私の専門であるICTの点から意見を述べるが、アンケートベースでデータを集めることが、大変であることに対してICTを活用すると良い。例えば、側溝が空いていることをスマートフォンで市役所に知らせる等がそれに当たる。ICTは、全体に対して万遍なくサービスをするのでなく、サービスを最適化してリソースを割り当てていく必要がある。まちや人の状態を、いい意味でリアルタイムに把握し、シェアすることに活用すればよい。

会長：ニューヨークのセントラルパークでは公園維持管理のため、公園利用者に破損状況等をスマートフォンから報告をもらうという事例がある。

委員：ICTに関連した取り組みについては、技術者が自治会にいて、街灯が切れている個所を見つけた人がインターネットやスマートフォンを活用して自治会に報告するシステムを作ったことがある。市を通さなくても各地域で進められるという事例かと思う。年配の人もやりたいこ

とがあれば、気づいたことで自分達が動けることを行うことが重要だと思う。また、ニュータウンに空き家が出ていて、新しく子育て世帯が家を購入したり、ニュータウン世帯の子どもが結婚して家を買ったりする事例を見ているが、どの場合も通勤圏だからで、若い人が残ってもらうには三田に住んで仕事ができることが大事である。コロナ禍で地方移住する人が目立つようになってきている中、三田市も候補となりうると考えている。市は若者の力を活かそうとしているが、起業したいという若者をどれだけ応援できるか、彼らに自分がやりたいことができるまちだと思ってもらうことが大事だと思う。

会長：徳島県神山町では、起業家を育てる私立の高等専門学校を設立されるとのことである。まち全体をフィールドに実施する。三田市でも同様の取り組みが参考になるため議論いただければと思う。

委員：基本目標に係る記載が抽象的であると思う。細かい点は記載できないことは理解するが、今回の総合計画の方針がある程度見えるようにして欲しい。基本目標に対する思いや若者や高齢者等、何を重点とするのか意図が見えてこない。補足の部分で書かないと表面的に終わってしまうように感じた。計画自体の柱は何かを書く必要がある。今のICTも深く論じれば色々出てくる。SDGsも大きい話でこれ以上どうしようもないと思うが、三田市として17のゴールのどれに力を入れるのかを話し合ってはどうか。

委員：ICTを活かしたまちづくりと高齢者の健康寿命を長くすることについて話されている。健康寿命として体力や認知という観点もあるが、社会のICT化が進むことで、これについていけないと社会から脱落する高齢者が出てしまう。例えばコロナワクチン接種予約の手段として電話しか利用できない方もいる。子・孫がいない2人暮らしの夫婦や独居の方はスマートフォンを持っていなかったりしており、そういう方々が社会の網から落ちないように行政でスマート化をするにあたって、誰もが参加できるような教育・システムを作っていただきたい。

会長：この観点はSDGsの「誰も取り残さない」というコンセプトと同じである。その他、全体を通してご意見をいただきたい。

委員：高平地区は世代間交流が非常に多い。高平地区の特徴として、歳をとった人が尊敬されている。得意なことが違うだけで、若い子はスマートフォンが得意だけど、高齢者は知恵があるというように、理想論的だがそんなまちになればいいと思う。

会長：ICTだけでなく、皆が様々な技術を持っているのが、さんだ里山スマートシティ構想という議論。まさに百姓が百の術を持っているということ。スマートシティ構想に、ローテクも含めてどう組み込むかという議論をすればよいと思う。

委員：全体的なことに関して述べたい。前回、一つのテーマではなく横断的に物事を考えながら議論を進めて欲しいという意見があったと思う。ICT等の話も単独でなく、組み合わせながら進めなければならないと思う。年配の人がまちづくりの中心を担っているけれども、若い人が取り組み活動を応援していけるようなまちにしていく必要があると思う。例えば、地域で有志が運営するコミュニティカフェで、若い人が高齢者にスマートフォンの使い方を教える取り組みをしている。これはICTを進める時に高齢者を取り残さない一助になるのではないか。地域を活かしながら、住民が参加しやすい身近なところとする取り組みを、市がサポートすることを考えてもらえるとうれしい。市がする取り組みは画一的になる。それぞれの地域が考えた多様な取り組みを支える仕組みを考えてもらいたい。

会長：行政が、市全体で進める施策と各地域で進める事業があり、これをどう横断的につなぐのかが求められているのではないかと。今回我々が挑むべき課題が、資料でいえば資料9の9ページ以降にあるように思う。

委員：神戸市のコミュニティカフェの事例を紹介する。当初は、兵庫県立大の学生中心となっていたカフェだが、現在は地域住民が運営の主体を担っており、平均年齢が78歳位である。カフェも単にお茶を飲むだけでなく、例えば、新型コロナウイルスワクチンの接種に関して、どうして良いかわからない人々の情報共有の場になり支援の場にもなった。横のつながりを普段から持てるようにすることの重要性が良く分かった事例である。

委員：関学生が三田市に残るためには、就職先が大きなネックとなっている。関西自体に残ることが少なくなっており、学生を三田市に残すには、学生生活終了後の生活をどう考えるかが重要である。SDGsの推進についての記載があるが、資料9の10ページのような扱いにすることはどうかと感じる。SDGsの概念は、根底としてちりばめられると思うので、見出しとして扱うのはどうか。コミュニティの話題に関連して、大学のゼミにおける議論で、コミュニティをポジティブに捉えるのはわかるが、あまり入っていきたくないという学生もいる。コミュニティは大事であるという認識はあるが、距離を持ちたいというのが現代の学生の率直な感想ではないか。学生からは、自分がどう関わるかのイメージが湧かないと聞いており、今回の事例等を伝えていかないと学生を巻き込込むことは難しいと感じた。

事務局：SDGsに関しては、まちづくり全体としてSDGsを推進するために基本構想で掲げている。今後施策毎のゴールを検討していくが、皆様の意見や議論も参考に盛り込んでいきたい。

会長：総合計画とSDGsの関係については、他の自治体の取り扱いを調査してもよいと思う。近隣自治体では、神戸市の総合計画がSDGsを前向きに取り入れていると聞いている。また、アメリカ等の他国の取り扱い方等にも視野を広げて調査してはどうか。

委員：今回の資料は、人口減少と高齢者がメインと見受けられるが、もうひとつ外国人という視点がある。日本全国では外国人人口が増えてきているので、労働人口等の観点からも検討してはどうか。

会長：外国人住民に関する取り組みでは、丹波地域、但馬地域でも事例があるため、参照いただければと考える。

委員：社会のルールが切り替わる時期に、50年先の価値観を探りながら今の価値観を作るという試みを行うことになると思うが、年功序列を守っていたら危機に対応できない。小さく進めると波及効果がないが、大きくやるとリスクが大きい。このリスクをカバーするのが行政の可能性ではないか。キッピーモールの百貨店の撤退等があるが、ローリスクでのチャレンジできる支援してはどうか。行政が多様な人を守ってまとめるという観点で支援いただければと思う。

会長：例えば台湾では、篤志家が活動場所を貸し出す等の同様の取組によって、起業支援を行っており、参考になるかもしれない。

委員：SDGsは全てに関わる問題だが、落としどころが大変だと思う。突飛な提案だが、学生のコンペを行って、プロジェクトチームを市が支援してはどうか。市・市民・企業の力を借りて、協働で横断的なプロジェクトを実験してはどうか。期間については3年あれば課題を見つけ改善もし、共通認識も図れると思う。

委員：神戸市が不動産を買い取って、活動拠点として低賃料で貸し出してベンチャーを支援している。

他の市町は既に行っているため、参考例として提供した。

副会長：まちづくりの基本目標である「ひと」「まち」「さと」、それぞれの言葉について4つか5つにカテゴライズする。例えば、「ひと」は若者、高齢者、外国人等、「まち」であればニュータウン、既成市街地、旧集落等、「さと」であれば自然や農地、リフレッシュ等。こうしてでてきた要素を組み合わせて掛け算を行うことで、具体的なプロジェクトが見えてくるのではないかと感じた。また、既成市街地、ニュータウン、里山といった各エリアを、例えば日常生活や消費生活、仕事、農地の保全等のテーマで人々がぐるぐる回るような仕組みやプログラムが作れないか。そのためには、今日の議論にあった、つなぐ役割のファシリテーター、コーディネーター、そして、信用して安心して参加できるようにする伝え方の仕組みが必要だと考えた。そして、取り組みは行政・ボランティア・ビジネスのどの部門でも可能だが、むしろビジネスができることの可能性を探っていくことで起業のチャンスが出てくると思う。ICTのボランティアが高齢化する人達を支える例のように、皆が技をもてるようにする取り組みを具体的に組みできれば面白いと思った。

会長：今回の議論を踏まえると、「まち」や「さと」をつなぐのは人でないかと感じた。人がつないで、人がつむいで、人が耕す。オーストラリアのリンクングパーク、ヘルシーパークといった公園の事例が参考になるかもしれない。SDGsについては、ゴールを入れるだけなら、どの行政も行っていることであり、それだけでは終われないと考える。SDGsをどのように扱うかを今一度議論いただきたい。それから、スマートシティやソサイエティ5.0については、SDGsの概念も関連するので、それらをどう横つなぎしていくか、部会でも考えてほしい。冒頭の健康な食べ物については、フードバンクガーデン等の事例があるため参考にしてほしい。大学生、若者定着もテーマとなった。就職先がなければ起業する環境をどう作るか、その時に空き家や空き室をどう活用するのかというふうに横つなぎしていくようなことも検討したい。「里山」という言葉については、新しい言葉を使うことも考えられる。例えば、神戸では「都市山」という言葉を使っている。10年先を見据えて新しい言葉を使うことについても議論できればと思う。

3 閉会

- ・次回は、6月28日（月）に開催する。